

ふるさとわかまちづくり

乙部自治区

「乙部」の由来

乙部町自治区は、四方を山と田畑に囲まれ、西には1000年以上の歴史を持つ観音寺、そして、東には八柱神社があり、この社寺に挟まれるように集落が形成されています。

戦時中は、乙部町35世帯で1600俵もの供出米を出したことがあるそうです。これは当時の基礎自治体である猿投町の1割にも相当したようです。

昔は、一世帯当たりの耕地面積が広く、朝早くから夜遅くまでの重労働が、広い耕地を人力で耕した先人達の苦勞がありました。

米以外にも、猿投山の麓の丘陵地と温暖な気候を生かした野菜、果樹の栽培が盛んに行われています。乙部自治区の代表的な作物は、梨、桃、スイカがあげられます。

「乙部町の農業」

農業の近代化は、昭和54年度から着工された矢作川北部地区畑地帯総合土地改良事業のおかげです。この事業は、3年計画で矢作ダムから高橋2地区、勘八、そして乙部へ農業用水を引くものでした。乙部地区は35haが対象で、着工後、一帯の果樹園が恩恵を受けることになりました。



地域伝説「うわばみ伝説」

猿投山の頂には昔、鈴ヶ滝と呼ばれる沢がありました。天文4年(1536)8月、城主中條将監の愛育している鷹がこの沢の大樹に巣を作り、大蛇がこの巣を窺うようになりました。村民の茂左衛門、助三郎が巣を監視していたところ、大蛇が巣を襲い、2人が弓矢で退治すると突然物凄い大雨になりました。村人は大蛇の胴体を滝の傍らに埋め、頭は村境の菱沼のほとりに葬り、弁財天として祀り今に至っています。



散策路

まちづくり活動

多くの人が集い、楽しめる場所が自治区内に少ないそのため、地域資源である「竹」を活用して地域の手で整備を行おうと活動を開始しました。

そして、自治区まちづくり計画により、区内の敷地に、散策路、竹林広場の整備を進めていきました。

自治区の課題

自治区の課題は、次の2点であります。

- 高齢化
- 自治区内を道路の交通安全対策

自治区内を横断する県道が、幹線道路として通り、多くの区民、学生、通過車両が

利用していますが道路が狭く、現在、新たな市道建設の計画があります。

完成すると、現在より安全になり、区民の生活がより快適になることが期待されます。

乙部自治区データ

(H19.4 現在)

設立：昭和42年
世帯数：69世帯
：48世帯(昭和51年)
組数：7組
面積：1.19Km²
自治区たより：「乙部町自治区だより」
回覧：月1回
ちびっ子広場：1箇所
ふれあい広場：1箇所
防犯灯設置箇所：15箇所
小学校：加納小学校区
自治区会館：乙部町児童館